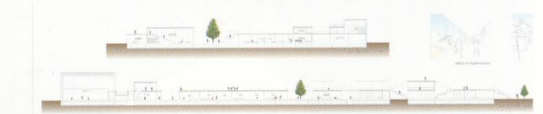




ツナガル、デキル

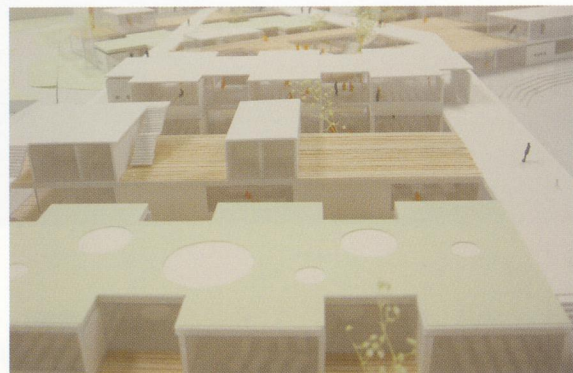
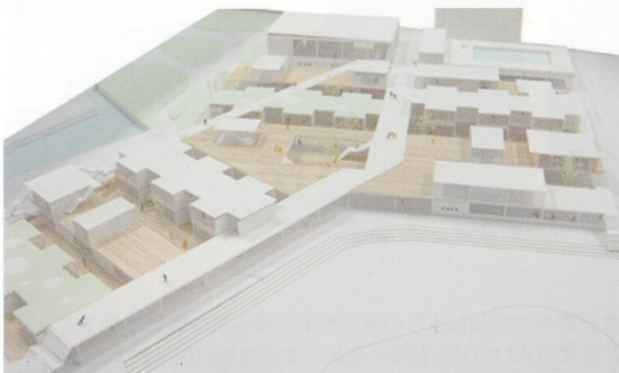
橋岡あずさ (はしおかあずさ)

東京電機大学 工学部建築学科



近年、小学校を狙った犯罪が多発し、小学校のセキュリティが厳しくなっている。その一方で、小学校を地域に解放する動きも多く見られる。そこで、小学生とまちの人がより深く関わる事が出来る小学校があったら、この両者を解決する糸口が見つかるのではないかと考えた。小学校の機能に、新たにまちの機能を加えることで、小学校とまちとの間に新たな関係ができるのではないだろうか。そして、小学校とまちが互いに関係しあうことで、新しい教育の場が生まれていくのではないだろうか。

小学校がまちの一部となるような、まちのみんなの施設となるような、そんな新しいタイプの小学校を提案する



【講評】 君の案は煮詰めると佃島という場所の特性は薄れ、小学生と一般人の接点(コミュニケーション)に集約されると思う。思うに「発見」と「驚き」が新たなコミュニケーションの始まりとなるのではないか。ハーメルンに代表される誘拐犯が手品やお菓子、音楽で子供をさらう手口、裏を返せばこれこそが接点として良い方向に应用できるのではないか。だから君は職工房と特別

教室を隣接させたのだと思う。君は建築空間提案で一応終わりにしたけれど、実はその先が大切で、接点の拡大発展方法がこの案を支えるシステムとして示されないと不十分ではないか。「接点」は君がこれからも模索しなければならぬテーマであり続けると思う。

【審査員：沼田正雄】